

普通のts少女

まるべー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、若干依存気質のあるts主人公とその幼なじみの話である。

目次

第七話	22
第六話	18
第五話	14
第四話	10
第三話	7
第二話	4
第一話	1

第一話

ボクの今世の名前は佐倉優子《さくらゆうこ》。前世があつて、かつ元男ということ以外は普通の女子中学生である。

「あのさ、ユウ子。もう、話しかけないでくれない？」

そして、そんなボクは今、転生して以来の幼なじみ兼親友とケンカをしているのだつた。

ボクが転生した理由は、ただの交通事故によるものだった。

まあ、ただのつて言つても、あのかいトラックが前から突っ込んでくる恐怖感は、今でも夢に出てくるほどに自分にとっては最悪なことだった。

そんなこんなで恐怖と激痛のもと一度この世を去ったボクは、正直、生まれ変わったことに絶望していた。

だって、よく考えてみてほしい。もう一度あの恐怖をボクに味わえと言うのだぞ？ 死に対する恐怖、激痛。生きて何かをしようとと言うよりも、あのまま死ねた方が楽だった。

でも、ボクには自殺なんてする度胸はない。それに、今世の親もなかなかいい人だった。

前世を持つせいで他の子供とは違う奇妙な子供だったにも関わらず、ちゃんとボクに愛情をもって接してくれたのだ。

そんな人たちを悲しませるのは、もっと嫌だった。

そんな時だった。あいつが話しかけてくれたのは。

ボクがいつも通り幼稚園で一人ぼつねんと死んだように部屋の隅で丸まっていた。まあ、言い訳じゃないけど当時のボクは自己嫌悪しかしていないような人間だったからね。遊びに誘われても、関わろうとすらしなかった。

でも、当時転園してきた津久井達彦《つくいたつひこ》がボクを強引に遊びの輪に入れたんだ。最初はただ鬱陶しいだけだった。でも、だんだんと楽しくなつていつちやつて。

そんなことはいけなはずなのに。人様の子供を一人殺して、その場所を奪い取った

ようなボクが、そんな感情を抱いてはいけなはずなのに。

でも、そんな僕の感情《いいわけ》なんてあいつはお構いなしだった。ドジで頭も悪くていつもヘラヘラしてて何も考えていないようなあいつは、それでも、いつも一緒にいて本当に楽しかった。

あいつという時だけは、生まれ変わったっていう恐怖を味わうことなく、心の底から楽しむことができた。

だから、だろうか。前世からの悪癖で、あいつのこともいつしかコンプレックスを擲揃うようになってしまったんだ。やれ忘れ物したんだとか、やれ僕に腕相撲で負けるのとか、やれ定期テストで3点取ったとか。

あいつは優しい性格だ。でも、こんなにさんざん言われたら、たとえ幼なじみだとしても嫌になるだろう。

実際、今がそうだ。もう、なんだかんだで7日間も会話していない。目すら合わせてくれない。

あれは、ケンカですらない。彼の、ボクに対する決別だ。

ボクは本当に、嫌われたんだ。

言い訳なんてしない。でも、また親友に戻りたいよ。

第二話

「おいおい、タツヒコ。おまえ最近どうしたんだよ。佐倉さんと最近会話してないじゃん。ケンカでもした？」

「いや、ケンカなんてしてないぞ？ただ、ちよつとな」

中学に入って以来の親友である神藤涼成《かんどおりようせい》が心配を少し入り混じりた声で俺に話しかけてくる。

確かに、最近ユウ子とは話すこともおろか、目も合わせないようにしているが、ケンカではない。

ただ、俺以外との会話が少なすぎるから、もう少し社交性を身につけてもらうための致し方ない処置である。

「かぁー。いーご身分ですこと。学園のアイドル様との惚気ですかぁ？男子であんなに気安く話しかけてくれるの俺だけぞアピールですかぁ？」

「ちげえよ。誰がそんなアピールなんかするかよ。というか、あいつが学園のアイドルなんかつとまるかよ。せいぜいがただのクソガキだぞ」

「文武両道。品位行正。誰にでも優しいうえにあんなに可愛いんだぞ。あの人以外に学

園のアイドルなんていないって生徒会長も言ってたから」

「生徒会長つてお前、なかなか交友関係広いな。というか、品行方正だろ？」

「そんな細かいことは気にしないの！むつきー！俺もあんな女の子が幼なじみの人生を送って見たかったよお！」

「本気で泣くなよ、みつともない」

あいつと幼なじみつてだけで、こんな羨ましがられるなんて、こいつに言われるまでは正直気づきもしなかった。

あいつ、佐倉優子は俺の幼なじみだ。物心ついた時にはすでに一緒にいて、ずっと遊んでいた。と、思う。まあ、小さい頃の記憶なんであまり覚えていないって言うのがホントなんだが。

「まあ、お前の気持ちなんてどうでもいいんだわ」

「いや、よくねえだろ」

「それよりも、佐倉さん見てみろよ。なんか今までに見たことないほどの素晴らしい負のオーラを放ってるんだけど？やつれているとか言う次元じゃないんだけど?？」

「そうだな」

「そこんとこ、どうお考えです？原因、一個しかないと思うんですけど」

「…。それは分かんないだろ」

「社交性つつたつて、普通に会話してるだろ？お前以外とも」

「いや、でも…」

「お前が何を考えているのかまではわからない。でも、もうあれ以上あんな状態の佐倉さんを俺は見たくない」

「さては貴様それが本音か」

「まあ、お前がどうするかはお前に任せる。でも、これ以上アイドル様をあんな状態にしてたら、学校の男子どもに刺されるだろうから気をつけるんだな」

「俺刺されるのか？怖すぎだろ」

じゃあな、といい涼成は席を立つ。そして俺に背中を向けてどこかへと歩き始めた。

いや、あいつ、授業5分前だけどこ行くんだ？

「俺はちよつくら、トイレに行ってくるよ」

え？間に合うそれ？

第三話

毎日が憂鬱になった。最近見なくなっていた、あのトラックの悪夢をまた見るようになった。また、生きていることに絶望しそうになった。

こんなのは、幼稚園以来だ。しっかりしないとな。

.....

.....

.....

...

————ピロン————

あの決別を受けてからもうすでに8日間がたっていて、その日の放課後を迎えてい

た。ボクは未だに心の整理をつけられていない。

『今日一緒にゼリアでご飯でも食べに行かないかい？』

携帯メッセージ。誰からかと思つたら達彦からのものだった。

正直、ボクは自分が許されるとは思つてない。たぶん、この誘いも何か違う意図があつてのものなのだろう。

ボクが達彦にした仕打ちを考えれば、彼のこの提案を退けることはできないに等しい。

でも、もしこれがボクへの今までの恨みつらみを晴らすための呼び出しだとしたら、行きたくない。

例えば親友じゃなくなったとしても、あいつとの思い出は、楽しいままのものでいさせたいから。

だからボクはこのメッセージを無視した。ついでに、あいつのアカウントもフレンド帳から消してやった。

あいつはやっぱり優しいから。幼なじみのフレンドメッセージも消さないほどに、優しいから。だから、何の気兼ねもないようにボクがやんなきやだめなんだ。

『フレンドを削除しますか』にはいと答え、津久井達彦をフレンド帳から消す。これであいつとの関わりは何もなくなった。

これであいつはボクなんか縛られることなく、これからの学校生活を楽しめる。

ボクは：。ボクは何だろうな。人に対して優しくしないといけないことを学べたかな。前世では全くこういった絶縁宣言などなかったから。いい経験になったのかな？ うん、いい経験になった。

ポフン、と布団にダイブする。ボクの体が、柔らかい布団に包まれ、少しの間悩み事を忘れさせてくれる。

自業自得だと言うことは理解している。それでも、もう一回だけでも、やり直したいな。

こう考えると、ボクって幼稚園以来ずっとあいつに依存していたのかもな。でも、仕方ないじゃないか。

死の恐怖、生への恐怖。それらがどうあっても拭われることなく、ボクの頭の中に巣食っているんだ。

怖い。怖いんだよ。最近は自分が本当に生きているのか毎朝鏡と睨めっこして。

でも、生きていることに嬉しさを抱えている自分を嫌悪して。

「ああ、地獄だ」

もう、いつそのことこんなので悩むくらいなら自分から…。

第四話

友達と話しながら、ボクは学校の帰り道を歩く。

親友二人と歩きながら、昨日見たアニメの内容にでもついて話して。

そして、そんな男時代のボクの記憶が、大きなトラックによって全て破壊される。
吹っ飛ばされたボクに駆け寄ってくる二人。

何か口になっている。

が、耳が聞こえない。声も出せない。体も動かせない。何より、激痛が身体中の至る所に走って、それどころではない。

ピーポーピーポーという救急車の音を尻目にボクは悪夢から目覚めた。

目を見渡すと、いつも通りの今世のボクの部屋。ベッド脇には、スマホが置いてあり、先日の達彦の絶縁が脳裏をよぎる。

「お、やっと起きたか？もう20時だぞ」

…？達彦の声？パツと声の方に顔を向けると、そこには達彦がいた。

さつきまで、ボクの机に座って勉強していたのだろう。そこには、達彦の勉強道具が並べられていた。

…。あ、夢か。だってボクは達彦に絶縁されたんだし。こんな小学生時代みたいに、もう達彦は来ないんだから。

「夢じゃないって、どうした？まだ寝ぼけてんのか？」

え？夢じゃない？

右の頬をつねる。痛い。

左の頬もつねる。痛い。

「え？夢じゃない！」

「はいはい、おはようさん。まあ、夜だけど」

そう言いながら、彼はボクに笑いかけた。

.....

.....

.....

.....

...

「さて、今日は言いたいことがあつてお前の部屋にきました。何か分かるな？」

∴。わかる。わかつてしまう。おおよそ、今までの恨みだろう。だからといって、ここまで押しかけてこなくてもいいのに。

「は、恨み？え、俺がお前への？」

だって、それしか考えられないじゃないか。今までのボクの横暴な態度への恨みしか。ついこの前のあの絶縁もあるんだし。

「絶縁？あ、あの時の∴。ちよ、ちよつと待て。お前は何か勘違いをしている。一旦俺の話聞いてくれ」

やだ。ボクは君との思い出は楽しくありたいんだ。

「いや、こんな性格じゃないじゃんお前。しおらしいなんてらしく無い。いいか？簡潔に重要なことだけ言う。だから、しつかり聞け」

やだったらやだ。

「俺はお前のことを別に嫌ってなんか無いし。あれは絶縁じゃ無い。というか、ちゃんと言ったよな？お互いにもっと友人を作るために、一旦距離を置こうって」

え？

「お前人の話聞いてなかったのかよ」

ボクの性格が嫌になったわけじゃ無いの？

「なるわけないだろ」

ボクのことを嫌いになったんじゃないの？

「だから、違うって」

第五話

「ひぐつ、ぐずつ、うう…」

「あ、ああ。勘違いさせて悪かったな。別にお前のことは嫌いになったわけじゃないから、な？泣き止もうぜ」

さっきの言葉に安心でもしたのか、泣き出した幼なじみの背中に手を回しながら、俺はあやすようにポンポンと手を叩く。

「ボク、ボク。嫌われたと思って…」

「嫌わない嫌わない」

「良かった、良かったよ」お”お”お”お”

「おーよしよし」

俺はその後しばらく、ユウ子が泣き止むまで、ユウ子の頭を撫で続けることとなった。

.....

.....

.....

...

「ごめんね、迷惑かけちゃって」

「いや、気にするなって。お前だけが悪いってわけでもないし」

落ち着いた後、申し訳なさそうに謝ってくるユウ子に、少し罪悪感が湧いてくる。

「まあ、確かに。ろくな説明もせず勘違いするような言い方をした達彦が悪いよね」

前言撤回。罪悪感なんて一切湧いてこなかった。むしろ腹まで立ってきたくらいだ。

元はと言えば勘違いした上に人の話を聞いていなかった。むしろ腹まで立ってきたくらいだ。

「はいはい、俺が悪うございやした。ですから、そろそろ許してくれませんかね」

「嫌です。君はボクの心を揺さぶった罰として、『正座コース』ボクを膝の上に乗せて

『』の刑に処するからね。あれ？もしかして、嫌な理由って、ボクが美少女すぎて反応

しちゃうからかい？」

「ちげえよ足が痺れて痛いんだって」

こいつつ！人の心配を返しやがれ。さっきまでのお前はどこいったんだよ。

そういえば今思い返してみると確かに、さっきのあいつはあまりにもこいつらしくなかつたな。もしかして、俺に嫌われたから、とか？

「そういやユウ子お前、いつも俺のこと煽つといて、俺に嫌われたとなるとその様かよ。笑えちまうな」

ぴたりと動きが止まった。どうやら効果は抜群のようだ。さて、このネタでどれぐら
いからかつてやろうかな。

そんなことを思うが、俺の頭には「自意識過剰乙笑笑（中国語に非ず）」といってバカ
にしてくるユウ子の顔と、言い返せない俺の姿がすぐに浮かんだ。

どうやら俺はこれですら揶揄うネタにできないようだ。これから毎日日本《まいにちほ
ん》でも読んで語気？語詩？語利？違うな。あ、語彙か。ボキヤブラリーでも身につけ
ようかな。

そんなことを考えているうちに、俺の膝上からユウ子が離れた。俺の敗北まであと数
秒。

何がくる？自意識過剰乙笑笑か？それともまさかの凶星で顔を赤くでもさせて反論
してくるのか？

そして少しして、ユウ子がその口を開いた。

第六話

「そう、だよね。やっぱり、嫌だったよね。人のこと煽る人なんて関わるだけでも嫌だよね。ホントに、ごめんね」

…？え？煽るでも顔を赤くするでもなく謝罪？

「ちよちよちよい。お前ホントに違うじゃん。ただ俺が嫌な奴になっちゃうから。言い返してくれないと」

ちよつと予想外すぎて反応が遅れたが、さよなら、と言って部屋から出ていこうとするユウ子の肩を掴み阻止する。どこ行こうとしてるんだこいつは。ここお前の部屋だぞ。

いや、今はそんなことではない。ちよつと言いきすぎたのだろうか？いや、確実に言いすぎたんだな。だから俺はいつも女の子にモテないって、コイツに言われるんだろうな。

「離してよ」

「離さない、離したらどっか行くだろお前」

「同情なんていらぬもん」

そうやって意固地になっていく幼なじみに対し俺は、少し面倒くさくなってきた。いやこんな言い方はダメか。

いやでも、こんな時間にこいつの勘違いでこれだけ時間取られてるんだ。少しぐらいはいいか。

そう考えた俺は、ユウ子の顔にぐいと手を伸ばし、こちらに向けさせる。そしてそのまま言葉を紡いだ。

「これは同情とかそんなんじゃない。俺がお前のことが好きでやっていることだ。大體、俺がお前のことを嫌いになるわけないだろ」

「で、でもボク……」

「いつも通り俺が何かやらかして。で、それをいつも通りお前がネタにして。それを俺は好きだからさ。だから、俺の隣で、ずっと俺のこと煽っててくれて」

俺はそう言つて、涙の流しすぎで赤くなっている幼なじみの顔に向かって、ハンカチを投げつける。

ポフン、と顔に当たつてそのまま床に落ちるかと思われたそれは、しかしてユウ子の手の中に収まった。

ポカン、と間抜けヅラを晒しているユウ子に向かって一言「じゃあな」というと、ユ

ウ子をそのままに俺は自分の家へと向かった。

そろそろ補導される時間帯だ。帰らないといけない。

「いや、それにしても恥ずすぎ。よくあんなこと言えたな俺」

家に帰って俺は一人悶絶していた。あまりにも、あまりにも小っ恥ずかしいことを言ってしまった。

あの間抜けヅラもたぶん、呆れてものも言えなかった顔なのだろう。

また次会った時に威勢よく俺はからかわれるんだろうな。

まあでも、それでもいいかもしれない。幼なじみで親友のあいつの、元気が戻ったのなら。

まったく、最初は友達を作るために離れようっていったのに、結局はそれも叶いっこしなかった。

「俺、あいつのこと好きすぎだろ」

小さい頃からずっと一緒にいた一番の親友。最初は、幼稚園の隅で丸まっていたあいつを見て、心配から声をかけたが、今では立派に元気で、俺の親友。それはこれまでも、そしてこれからも変えたくない。

第七話

「あ、おはよう達彦！」

「おはよう、ユウ子」

翌日、学校へと向かっていた俺は、その道すがらユウ子と出会った。そして、せっかくだからとそのまま一緒に登校することになった。

「今日も学校だよ。素晴らしくくだるいねえ」

「そうだな」

その幼なじみの様子は昨日とは打って変わって元氣瀉瀉《はつらつ》で…。いや元氣すぎない？これ絶対俺関連以外で何かあっただろ。さては宝くじでも当たったか？

まあ、そんなことはどうでもいいんだが。とにかく、ユウ子が元に戻って良かった。あの状態のユウ子を見るのはだいぶ心が痛かったし。

「むう。ちゃんとボクの話聞いている？」

「え？あ、ああ聞いている聞いている。やつぱり、俺もそう思うぜ」

「だよねえ、良かったあ」

やば、何も話聞いてないのバレそうになった。まあ、バレなかったからよしとしよう。

それにしても本当に昨日何があったんだ？こんなに幸せそうな顔浮かべやがって。流石に気になる。

「なあ、お前……」

「あ、そういえばボク今日日直じゃん！先行かなきやだから、じゃあね！」

「え、おう、気をつけろよ！」

聞こうとした直後、急に走り出したユウ子のせいで聞けずに終わってしまった。まあ、あとで学校で聞けばいいか。

「おう、タツヒコ。お前佐倉さんと仲直りしたんだな。良かった良かった」

教室に着いた途端、挨拶もなしに話しかけてきたのは神藤涼成《かんどおりょうせい》だ。

「いや、仲直りというか、すれ違いというか……。ていうか、何でわかったんだよ？」

「佐倉さんの纏うオーラが違う!!」

「オーラってなんだよ…」

「みてみる」とでもいうようにアゴをクイツとする涼成に做ってユウ子の方をしてみると、確かに昨日とは全然違う雰囲気であった。というか、朝に自分でも感じていた気がする。

「あ、タツくんおはよう。その様子だとゆうちゃんも仲直りはできたようですね」

聞こえてきたその声に顔を向けてみると、そこには柏瀬茉由《かしわさまゆ》がいた。彼女は、俺とユウ子の数少ない友人の一人であり、共通の友人でもある。

「ああ、おはようまゆ。まあ、普通に仲直りできたよ」

「ああ、いいなあ。私も落ち込んでる時に颯爽と駆けつけてくる白馬の王子様的な存在が欲しいなあ」

流し目でこちらを見てくるまゆ。口元が笑っているのだから丸わかりだ。

「お前なあ。別に俺とユウ子はそんなんじゃない」

「まゆちゃん。おはよう」

嗜めようとする俺の声を、ユウ子が被せてきた。あれ？こいつさつきまで日直の仕事してたんじゃない？

「あ、ユウ子おはよう！」